

公表

## 事業所における自己評価総括表

○事業所名	インクルーシブデイサービスippo			
○保護者評価実施期間	R8年2月10日		～	R8年2月28日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	34	(回答者数)	32
○従業者評価実施期間	R8年2月23日		～	R8年3月6日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数)	6
○事業者向け自己評価表作成日	R8年3月17日			

## ○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	<p>1. ICTツール(デイロボ)を活用した きめ細やかで透明性の高い情報共有</p> <p>当事業所の最大の強みの一つは、「デイロボ」を通じた保護者との密な連携です。 日々の療育の様子を写真付きで詳細に記録し、活動のねらいや子どもの成長した姿を丁寧にフィードバックしている点について、多くの保護者から高い評価を得ています。 これにより、家庭でもポジティブな声掛けが可能になり、「療育と家庭が繋がりをもち生活できている」という満足度の高さに直結しています。 職員間においても、デイロボや日々のミーティングを活用して情報の蓄積と共有がスムーズに行われており、支援の質の維持・向上に役立てられています。</p>	<p>1. ICTツールを活用した 「情報の可視化」と「即時性の高い職員間連携」</p> <p>保護者様との信頼関係構築と、支援の質を一定に保つための情報共有を徹底しています。</p> <p>「デイロボ」を活用した詳細なフィードバック： 単なる活動報告に留まらず、個別支援計画の目標に基づいた「ねらい」や、活動を通じて見られた「子どもの成長した姿」を写真付きで丁寧に伝えていきます。これにより、家庭でもポジティブな声掛けができるよう支援しています。</p> <p>多角的な情報共有体制： 毎朝のミーティングで前日の振り返りと当日の役割分担を詳細に行い、その内容をデータとして蓄積・共有することで、職員全員が同じ方向を向いて支援に当たれるよう意識しています。</p>	<p>1. 保護者支援の拡充 (保護者会・ペアレントトレーニングの開催) アンケートでは保護者同士の交流や情報提供の機会を求める声が多く寄せられました。</p> <p>交流と学びの場づくり： 次年度は、夏前の実施に向けて保護者会の開催を計画しています。</p> <p>ニーズに即したコンテンツ提供： 内容については、ペアレントトレーニングや、お子様の将来を見据えた進路に関するお話など、ご家庭のニーズに合わせた研修会や情報交換の場を設け、家族支援の質を高めたいと思います。</p>
2	<p>2. 子どもの主体性を尊重し、専門性と活気に満ちた支援プログラム</p> <p>子どもたちが「また行きたい」と感じる、魅力的な活動の提供と職員の関わりも大きな強みです。 個別支援と集団活動がバランスよく構成されており、特に個別課題において子ども自身が「今日はこれをやりたい」と選択できる自己決定を促す支援が評価されています。 お出かけや季節のイベント(お祭り、ハロウィン、運動会など)が豊富で、地域や他事業所の子どもたちと交流する機会も積極的に設けられています。 保護者からは、「職員が明るく活気があり、子どもと一緒に楽しんでいる」「専門知識が豊富で寄り添った支援をしてくれる」といった、スタッフの人間性と専門性の両面に對する厚い信頼が寄せられています。</p>	<p>2. 「静」と「動」を意識した環境の構造化とユニバーサルデザイン</p> <p>子どもたちが自分自身で見通しを持ち、安心して過ごせる空間づくりに注力しています。</p> <p>エリア分け(ゾーニング)の徹底： 活動内容に応じて「静」と「動」のスペースを明確に分けることで、集中できる環境と発散できる環境を両立させています。</p> <p>視覚的支援とバリアフリー： ロッカーや靴箱にマークや名前を掲示するなどの「視覚的な構造化」に加え、車椅子利用のお子様も安心して過ごせるよう、洗面台やトイレのバリアフリー化、スロープ設置などの環境整備を意識的に行っています。</p>	<p>2. 防災・安全管理体制の周知と実践的な訓練の強化</p> <p>避難訓練の実施状況について、保護者様の認知度が低いという課題が見受けられました。</p> <p>訓練の可視化と周知： 年2回の定期的な防災訓練に加え、今後は実施内容をご家庭にも積極的に周知し、安心感につなげます。</p> <p>スタッフの対応力向上： 職員研修においても、単なるマニュアルの確認に留まらず、ロールプレイ形式の研修を積極的に取り入れ、実際の緊急場面で迅速かつ的確に動ける体制を強化します。また、てんかん発作等の個別の疾患情報についても改めて詳細な把握と共有を徹底します。</p>

3	<p>3. インクルーシブを実現する バリアフリーで開放的な施設環境</p> <p>物理的な環境面においても、「インクルーシブ」を体現した設計が強みとなっています。 天井が高く開放的な空間であり、車椅子でも利用しやすいバリアフリー設計（トイレ、洗面台、スロープ等）が完備されている点について、利便性と安心感の両面で評価されています。</p> <p>活動内容に応じたゾーニング（静と動のエリア分け）や、マーク・名前を用いた視覚的な構造化など、子どもの特性に配慮した環境づくりが徹底されています。 テラスの活用や清潔感のある生活空間も、子どもたちが安心感を持って通所できる要因となっています。 これらの強みを活かしつつ、今後は保護者会の開催や避難訓練の周知、専門的支援（PT/OT/ST等）のさらなる充実など、評価の中で挙げた課題にも真摯に取り組んでまいります。</p>	<p>3. 本人の主体性を引き出す「自己決定」の尊重と段階的な支援</p> <p>「やらされる活動」ではなく、子ども自身が選ぶ経験を大切にしています。 選択の機会提供： 個別課題において、複数のメニューの中から「今日はこれをやってみよう」と子ども自身が選べる機会を設けています。 スモールステップでの目標設定： 活動プログラムを頻繁に変えるのではなく、個々のアセスメントに基づいた目標に向かって段階的に取り組めるよう計画しています 。また、お出かけや季節行事（お祭り、運動会等）を通じ、地域や他者との交流の幅を無理なく広げられるよう工夫しています。</p>	<p>3. 関係機関との連携強化および専門的支援の深化</p> <p>外部機関とのさらなる連携や、より専門的なアプローチを求める意見を反映させます。</p> <p>移行支援・地域連携の充実： これまでの学校・病院との連携に加え、今後は必要に応じてお子様が通っている園への訪問なども行い、より丁寧な情報共有と一貫性のある支援を目指します。</p> <p>専門性の向上とプログラムの探求： 保護者様から要望のあったPT・OT・ST等の専門的知見を活かした支援のあり方について検討を深めます。あわせて、お子様の「自己決定」を促す支援技術をさらに磨き、日々の個別支援計画へ効果的に落とし込んでまいります。</p>
---	---	--	--

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	<p>1. 非常災害時等の訓練実施に関する周知と安全管理体制の共有</p> <p>防災対策や緊急時マニュアルの整備は行っていますが、保護者様への情報共有が不十分である点が課題です。 避難訓練の実施について、アンケートでは「わからない」「経験がない」と回答した保護者が約4割にのぼり、実施状況が十分に伝わっていません。 職員間においても、てんかん発作等の個別疾患に関する情報把握に一部漏れがあるとの指摘があり、緊急時の対応力を高めるための情報共有の徹底が求められています。 今後は、訓練の様子を「デibroボ」等で積極的に発信するとともに、ロールプレイ形式の職員研修を取り入れるなど、実践的な体制強化が必要です。</p>	<p>1. 情報発信の「内容」と「周知方法」の乖離</p> <p>避難訓練や安全計画の周知が不足している背景には、「計画の策定」と「実施の可視化」の間にギャップがあることが挙げられます。 事業所内では事故防止や緊急時対応のマニュアルを策定し、年間計画に基づき年2回の防災訓練を実施していますが、その具体的な実施状況や内容が保護者様へ十分に伝わっていません。 「紙」でのマニュアル整備には留まっているものの、実際に訓練を行っている様子を「デibroボ」等で発信したり、ご家庭が安心できる形での「実践の共有」が不足していたことが、保護者様の「わからない」という回答に繋がっています。</p>	<p>1. 防災・安全管理体制の「見える化」と実践的な対応力の強化</p> <p>マニュアルの整備や訓練の実施が保護者様に十分に伝わっていない現状を改善し、安心感を高めます。</p> <p>訓練実施の積極的な発信： 年2回の防災訓練の際には、その様子を「デibroボ」やSNS等で写真とともに詳細に報告し、どのような想定で訓練を行ったかを保護者様へ可視化します。</p> <p>ロールプレイ形式の職員研修： 机上のマニュアル確認だけでなく、緊急場面を想定したロールプレイ形式の研修を定期的に行い、スタッフ間の動きを最適化します。</p> <p>個別疾患情報の共有徹底： てんかん発作等の個別の疾患情報について、職員間での把握に漏れないよう、改めて情報共有の仕組みを強化し、緊急時の即応体制を整えます。</p>
2	<p>2. 保護者支援プログラム（ペアレント・トレーニング等）および交流機会の不足</p> <p>日々の情報共有は密に行われていますが、体系的な家族支援や保護者同士のつながりを作る機会が不足しています。 ペアレント・トレーニングや研修会の開催状況について、「いいえ」「わからない」とする回答が一定数見られ、職員側からも「実施できていない」という自己評価が出ています。 「父母の会」や「保護者会」を通じた交流機会についても、認知度や実施回数に課題があり、保護者様から「進路の話」や「お悩み相談会」などの開催を望む声が寄せられています。</p>	<p>2. 開設初期段階における「直接支援」への優先的注力</p> <p>保護者会やペアレント・トレーニングが未実施である要因として、事業所の運営フェーズとリソースの配分が考えられます。 当事業所は比較的新しい施設であり、これまでは日々の療育環境の整備や、お子様一人ひとりへの直接的な支援体制の構築を最優先に進めてきました。 職員間のミーティングは非常に濃密に行われ、個別支援計画の作成や日々のフィードバックには注力できていますが、「家族支援プログラム」や「保護者同士の交流機会」といった体系的な仕組みづくりまで手が回っていなかったことが、自己評価における「いいえ」の要因となっています。</p>	<p>2. 家族支援プログラムの確立と保護者コミュニティの形成</p> <p>日々の連絡に加え、体系的な家族支援と保護者同士が繋がる機会を創出します。</p> <p>保護者会および研修会の定期開催： 来年度の夏前を目途に、第一回保護者会開催に向けて取り組んでいます。そこでは進路に関する情報提供や、保護者様のニーズが高いペアレント・トレーニングなどの学びの場を設けます。</p> <p>相談体制の周知と充実： 些細な悩みでも気軽に相談できる場があることを改めて周知し、デジタル連絡帳（デibroボ）だけでなく、面談や対面でのコミュニケーション機会を意識的に増やします。</p>

<p>3</p>	<p>3. 地域資源・専門機関との外部連携および専門的支援の深化</p> <p>地域交流は積極的に行っていますが、特定の機関との連携や専門職によるアプローチにおいて、さらなる充実の余地があります。</p> <p>放課後児童クラブ（学童）や児童館との交流については、現時点では十分に組み合わせていない状況です。</p> <p>地域の児童発達支援センター等からのスーパーバイズ（助言・指導）を受ける機会がまだ設けられておらず、困難事例への対応力を高めるための外部専門機関とのネットワーク構築が課題となっています。</p> <p>保護者様からは、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）、ST（言語聴覚士）等による専門的な支援を求める具体的な要望も挙がっており、支援の質のさらなる向上が期待されています。</p>	<p>3. 外部機関との「能動的な連携ネットワーク」の未構築</p> <p>地域資源や専門機関との連携が限定的である要因は、連携のあり方が「事後的・受動的」になっていることにあります。学校や病院との基本的な情報共有は行われていますが、実際に園を訪問したり、児童クラブ（学童）等と積極的に交流したりといった、一歩踏み込んだ地域連携の機会を十分に持てていませんでした。</p> <p>また、専門機関（児童発達支援センター等）からのスーパーバイズについても、「困難事例があった際に検討する」というスタンスに留まっており、日常的な質の向上のための外部専門職との定例的な協力体制がまだ確立されていないことが課題の要因です。</p>	<p>3. 専門的支援の質の向上と 地域・外部機関とのネットワーク拡充</p> <p>外部の専門的知見を柔軟に取り入れ、地域の中で多角的に子どもを支える体制を築きます。</p> <p>専門職（PT・OT・ST）による知見の導入： 理学療法士、作業療法士、言語聴覚士等の専門的な視点を支援プログラムに活かせるよう、研修や外部助言の機会を検討し、保護者様の要望に応えます。</p> <p>能動的な地域連携の推進： 園訪問を積極的に行い、一貫した支援体制を構築するとともに、現在は十分ではない放課後児童クラブ（学童）や児童館との具体的な交流機会（イベントへの招待等）を創出します。</p> <p>外部スーパーバイズの活用： 地域の児童発達支援センター等と連携し、困難事例に対する助言を受ける体制を整えることで、職員の専門性と支援の質の底上げを図ります。</p>
----------	--	--	---